



くすの木

春日部市立医療センターだより

発行
春日部市立医療センター
有馬 健
発行日
令和8年3月1日
編集
広報委員会
第122号

「さけ特集」パートⅡ

くすの木 120 号にて紹介いたしましたとおり、当院からは 100 名を超える臨床研修医が巣立っています。そのなかから 7 名もの医師が、当院に戻り、患者様に寄り添いながら、後輩の育成にも励んでおります。その姿が、あたかも大海原から母なる河川に戻る鮭のようなので、戻ってきてくれた 7 名の医師について「さけ特集」として紹介しております。

122 号では、5 名の先生方を紹介します。

春日部市立医療センターで育まれた私の医師人生

呼吸器外科部長
関 秋 明



私は1998年に中国医科大学を卒業後、中国・上海市の病院で外科医として勤務を始めました。臨床の現場で経験を積む中で、がんの発生や細胞増殖の仕組みといった基礎医学への関心が強まり、研究の道を志すようになりました。その後、東京大学の岡山博人教授の研究室に所属し、細胞周期やがん発生メカニズムの研究に従事しました。博士号取得後は特任助教として研究を続け、国際誌に筆頭著者として論文を発表する機会にも恵まれ、研究者として充実した日々を過ごしました。



一方で次第に、「患者さんに直接寄り添い、自らの手で治療に関わりたい」という思いが強くなり、日本の医師免許を取得しまし

た。2010年より春日部市立医療センター（当時：春日部市立病院）で初期研修を開始しました。外国人として日本の医療現場に立つことは大きな挑戦であり、言葉の壁や医療文化の違いに戸惑い、不安も多くありました。しかし、多くの先生方が熱心に指導してくださり、看護師やコメディカルの皆さんにも支えていただき、少しずつ現場に慣れていくことができました。

特に、当時の外科部長であった三宅先生から信頼をいただき、初期研修1年目で腸吻合手術の第一助手を任せていただいた経験は、今も忘れられません。その後、田川先生との出会いをきっかけに呼吸器外科に興味を持ち、国立病院機構東埼玉病院で青山先生、田川先生のご指導のもと、胸腔鏡手術をはじめとする呼吸器外科の研鑽を積みました。

2014年には田川先生の後を追う形で、再び

春日部市立医療センターに戻りました。川田先生、石田先生、苗代先生、杉本先生ら若い先生方とともに、忙しい日々を支え合いながら診療にあたってきました。

春日部市立医療センターの最大の魅力は「働きやすさ」にあります。上級医の先生方は惜しみなく指導してくださり、看護師・技師・事務スタッフとの距離も近く、自然と声を掛け合える温かい雰囲気があります。困ったときにはすぐ相談でき、ミスがあってもチームでフォローし合える環境が整っており、新しいことにも前

向きに挑戦できる職場です。

私自身も日本での生活と医療に携わることを生涯の道と決意し、2023年には日本国籍を取得しました。地域の一員としてこの地で医療に携われることに、深い喜びと責任を感じています。患者さんや地域の皆さまの笑顔に支えられながら、これからも春日部市立医療センターという温かいチームの一員として、仲間とともに地域医療に貢献していきたいと心から願っています。

ご縁から始まった私の医師人生

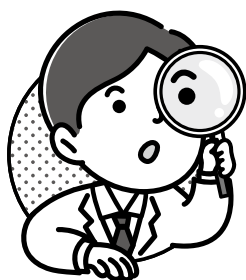


呼吸器外科医長
石田 輝明

はじめまして。呼吸器外科に勤務しております石田輝明と申します。地域の皆さまに安心して医療を受けていただけるよう、日々の診療に取り組んでおります。今回このような機会をいただきましたので、私自身のこれまでの歩みと、当院とのご縁について少しご紹介させていただきます。

私は2014年3月に産業医科大学を卒業しました。出身は兵庫県姫路市で、大学進学を機に福岡県北九州市にある産業医科大学で6年間の学生生活を送りました。その後、大学の部活動で親しくさせて頂いていた先輩が当院に勤務されていたご縁から、春日部の地で研修を行う機会をいただき、当院で初期臨床研修を行うことになりました。

産業医科大学は学生のうちに入局先を決めてから研修医になるという特徴があります。私は



学生時代に産業医科大学第二外科（呼吸器・胸部外科）へ入局しました。当院には市中病院では比較的珍しく呼吸器外科があり、田川部長の

もとで手術件数が年々増加している、非常にアグレッシブな環境の中で診療が行われていました。

研修医時代には選択科研修が9ヵ月ありましたが、そのうち7ヵ月を呼吸器外科研修に充てました。気胸や肺部分切除といった手術の執刀機会をいただき、さらに研修医を卒業する段階では通常なかなか経験できない肺葉切除の手術も執刀させていただきました。若い医師にも積極的に経験の機会を与えてくださる田川部長の懐の深さと、丁寧に指導してくださった田川先生、かん先生、青山先生のおかげで、呼吸器外科医としての基礎を築くことができたと感じています。

本来であれば大学の制度上、医師3年目には大学へ戻る必要がありましたが、教授のご理解をいただき、3,4年目も当院で勤務させていただきました。研修医時代から在籍していたこともあり、他科の先生方にも相談しやすく、診療科の垣根が低い雰囲気の良い環境で診療に取り組めたことは、私にとって大きな財産であり、些細なことも相談しやすい環境であることは当院の強みであり、ひいては患者さんの利益に繋がることだと思います。

その後、医師5年目で大学へ戻りましたが、生活環境の変化などもあり、改めて自分の進む道を見つめ直す機会となりました。そして医師6年目の時に再び当院に戻り、現在まで勤務を続けており、気がつけば長くこの病院で診療に携わらせて頂いております。

同じ病院で長く働くことについては、外の施設と比べて診療の水準がどうなのかと考えることもありました。しかし大学での診療や大学の関連病院の先生方の取り組みを知る中で、当院の呼吸器外科が行っている診療は十分に誇れる水準であることを改めて実感することができました。

今回の広報誌のテーマは「さけ」と伺いました。さけは大海原で成長した後、生まれた川へと戻ってくると言われています。私自身も外の環境を経験した後、医師として育てていただいたこの病院へ再び戻ってきたという意味では、どこかその姿に重なるものを感じています。これまで育てていただいたご恩を、これからの診療や教育を通して少しずつお返ししていけるよ

う努力していきたいと考えています。医師として12年目を終え、これから13年目を迎えるようにする中で、今後もこの地域の医療に貢献していければと思っています。

呼吸器外科は医師数が決して多い分野ではありません。今後は体制の変化も見込まれる中で、これまで以上に責任の重さを感じる場面も増えてくると思います。市立病院としてまずは地域の皆さまを優先し、安心で安全な医療を提供することを第一に、地に足のついた診療を続けていきたいと考えています。

また学術活動としても年間3～4例程度の学会発表を継続し、論文執筆にも取り組んでいきたいと思っています。さらに、これまで自分が多くの先生方から指導していただいたように、研修医をはじめとする若い医師の育成にも力を注ぎ、次の世代の医師たちが成長できる環境づくりに貢献していきたいと思っています。

地域の皆さまに信頼される医療を提供できるよう、これからも日々努力を重ねてまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

春日部市立医療センターと私

消化器内科 医長
延 嶋 広 大



2022年4月から消化器内科に戻ってきました延嶋広大と申します。今回、藏先生から鮭特集ということで、原稿の依頼がありました。藏先生の意図する鮭とは生まれた川(初期研修をした病院)から海(他の病院)で成長して、生まれた川に戻ってくることかと思います。私の場合は初期研修を春日部市立医療センターで行い、その後も残り、内科専門医のための後期研修も当院で行いました。それから、大学病院で2年間研鑽を積み、再び当院に戻ってきました。医師人生の大半を春日部市立医療センターで過ごしているため、藏先生の意図する鮭とは、本当の意味では違う気がするのですが、このような機会を頂いたため、今までの私の軌跡を綴り

たいと思います。

まず、初期研修についてですが、私は当院が第1志望ではありませんでした。マッチングで通らず、第2志望だった当院で初期研修を開始することとなりました。当院を選んだ理由としては、地元近く診療科が揃っている病院として選びました。結果としては、充実した2年間を送ることができ、第1志望に落ちて良かったと思っています。具体的な点としては、当院の先生方は面倒見の良い方が多く、質問しやすく、医師としての力がついていくのを実感できました。また、初期研修には必修のローテーションと別に、研修する科を自分で選べる選択期間が10か月ほどあります。私の場合は、医

師としての知識の幅を増やすために、必修研修に含まれていなかった科を選びました。整形外科、脳外科、泌尿器科、眼科、耳鼻科、皮膚科、形成外科、放射線科、検査科など、当院にある科はほぼ制覇しました。このときに、各科の幅広い疾患を経験したことが現在の私の診療に生きています。

研修医も終盤になってくると、自分の専門科を決めなくてははいけません。私は学生の頃は救急科志望でした。もともと医師を志した動機に、自分の周りの人を救いたいという思いがあり、患者を助けるというイメージが湧きやすかったからです。しかし、実際に救急の現場を経験して、急変時の対応だけでなく、病気の早期発見や急性期を過ぎた後の管理などの重要性を感じました。患者さんごとに医療に求める内容が異なることは明らかで、患者さんと一期一会ではなく、時間をかけて関係を築くことによって、患者さんごとのニーズに合った良い医療を提供できるのではないかという考えになりました。今後は高齢化にともない複数の疾患を合併する患者さんが増えると考えられ、患者さんのことをトータルでマネジメントできる総合診療科を志望するようになりました。このこ



とを春日部市立医療センターの先生方に相談したところ、総合診療科をするにしても、何かしら専門領域があったほうが良いと多くの先生に

助言いただきました。そこで内科メジャーである循環器科と消化器科のどちらかで迷いました。最終的には扱う臓器が多く、がん診療及び緩和医療にも携わる消化器科が、一番総合診療科に近いと思い消化器科を選択しました。

多くの同期が初期研修を終え、大学病院などで専門研修となる中、私は初期研修終了後も春日部市立医療センターに残り、内科および消化器科の研修を続けました。当初は私も大学病院などで専門研修を受ける予定でしたが、現院長の有馬先生と消化器内科部長である福本先生に慰留を求められ残った形です。初期研修からお世話になった各科の先生には、引き続き指導を受けることができ、内科・消化器科だけでなく他科の疾患の見識も広がり、私の求めている医師像に近づくことを実感できました。その後、大学病院で2年間の研修を積み当院に戻ってきました。現在も大学病院には週1回研修に赴き、患者さんに最新の医療を提供できるよう自己研鑽に努めております。

現在の消化器内科は主任部長である福本先生を筆頭に、消化器領域だけでなく総合的に診療し、少しでも患者さんにとってプラスになるよう努力する医師が揃っていると感じます。しかし、医療という不確実な要素が伴う領域であることや、マンパワー不足により至らない点も出てしまうと思われます。私たちが努力を続けることはもちろんのこと、多くの方にご理解ご協力を得られ、当院がますます地域患者に還元できるようになることを願っております。

また戻ってきたいと思える場所：私が春日部市立医療センターを選んだ理由



放射線科
金 森 信 祐

2024年4月から、放射線科で治療医として勤務しております、金森信祐と申します。2019年に埼玉医大を卒業し、臨床研修医として当院で2年間勤務させて頂きました。研修医開始時

が39歳と少し遅いスタートではありましたが、右も左もわからない状態から、医師としての基礎を学ばせて頂きました。今回、このような貴重な執筆の機会をいただきましたので、私自身

のこれまでの歩みを振り返りつつ、再び戻ってきて改めて感じる当院の魅力についてお伝えできればと思います。

2019年4月から2021年3月までの初期研修期間、私はこの病院で医師としての第一歩を歩み始めました。当時はわからないことが多く右往左往するばかりの毎日でしたが、診療科の垣根を越えて、病院中の先生方が温かく目をかけてくださり、一つずつできることが増えていく成長の実感を糧に、充実した日々を過ごしました。この時に学んだ、患者様を全人的に診る姿勢や救急の現場で培った判断力は、放射線治療医を志した今でも私を支えてくれる大きな財産となっています。

初期研修修了後は、母校である埼玉医科大学で3年間の後期研修を行い、放射線治療医としての道を歩み始めました。大学病院という環境では、市中病院ではなかなか出会うことのない希少な症例を数多く経験することができ、多忙な中にも放射線腫瘍医としての大きなやりがいを感じる毎日でした。特に、がん診療における全身管理の重要性を痛感する場面が多々ありましたが、その際に助けとなったのは、当院での研修医時代に各内科を中心に一般診療を幅広く学んだ経験でした。専門領域を深める時期だったからこそ、当院で培った医師としての土台の重要性を再認識することができたのです。

そして2024年4月、後期研修修了のタイミングで、再び春日部市立医療センターの放射線

科に入職いたしました。改めて当院で働く大きなメリットだと感じるのは、自分自身のやりたいことや勉強したいことに主体的に取り組める



環境が整っていることです。どの診療科の先生方も非常に教育熱心であり、我々若手の成長に惜しみなく力を注いでくださいます。また、市中病院でありながら日本大学との連携が極めて強固であり、学術的な最新知見に常に触れられる点は、専門医を目指す上でこの上ない魅力です。

現在は、日本の放射線治療の礎を築いてこられた田中先生のご指導を直接仰ぐという、大変貴重な時間を通じて日々着実な成長を実感すると同時に、今夏の専門医二次試験に向け、自己研鑽に励む毎日です。各診療科の垣根を越えて、日常業務を通じて主体性を持って成長を望めるこの環境は、どの診療科に進むとしても若手医師にとって大変プラスになる環境だと感じます。

これまで多くの成長の機会をくれたこの病院に、今度は日々の仕事を通じて、感謝の気持ちを少しずつ返していくと同時に、地域の皆様に安心をお届けできる医師を目指して、これからも日々精進してまいります。

初期臨床研修から現在まで

2025年4月より春日部市立医療センターで勤務させていただくこととなりました泌尿器科4年目の上原璃央と申します。初期臨床研修医として二年間を過ごした当院に、泌尿器科医として戻る機会をいただきましたことを、大変光栄に思っております。研修医として右も左も分か

泌尿器科
上 原 璃 央



らなかった頃に支えていただいた場所に、専門分野を学ぶ立場として戻ってこられたことは感慨深く、同時に身の引き締まる思いで日々診療にあたっております。

私は日本大学医学部医学科を卒業後、当院にて二年間の初期臨床研修を行いました。救急対

応をはじめ各診療科で幅広い症例を経験する中で、医学的知識や手技のみならず、患者様やご家族の背景を理解しながら診療を行う姿勢の重要性を学びました。地域の中核病院として多様な患者様を受け入れる当院での経験は、医師としての基礎を築くうえでかけがえのない時間であったと感じております。また、多職種が互いに尊重し合いながら連携する医療現場の在り方は、現在の私の診療の土台となっております。

初期臨床研修修了後は日本大学医学部泌尿器科学分野に入局し、関連病院にて勤務してまいりました。泌尿器科は、前立腺がん、膀胱がん、腎がんなどの悪性腫瘍の診療から、尿路結石、尿路感染症、前立腺肥大症、神経因性膀胱、過活動膀胱といった良性疾患まで、急性期と慢性期の双方に関わる幅広い領域を担っております。

手術療法と薬物療法を状況に応じて選択し、患者様一人ひとりの生活背景や希望を踏まえながら治療方針を決定する点に、この分野の奥深さがあると感じております。特に排尿機能に関する症状は、患者様の生活の質や社会参加に直結する問題であり、症状の改善によって日常生活が取り戻される瞬間に立ち会えることは、大きなやりがいであると同時に責任の重さを実感

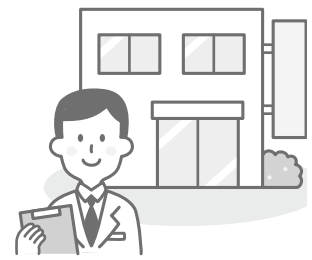
する場面でもあります。

泌尿器科医4年目となった本年、再び当院で勤務する機会をいただきました。

研修医時代にご指導

いただいた先生方や支えてくださったスタッフの皆様と再び共に働けることは大きな喜びであり、今度は自らが地域医療を担う一員として役割を果たす番であると感じております。これまで各施設で培ってきた経験を還元し、安心して受診していただける診療体制づくりに貢献してまいりたいと存じます。

本年は泌尿器科専門医試験を受験予定であり、これまでの診療経験を整理するとともに、知識と技術のさらなる向上に努めております。資格取得は一つの節目ではありますが、真に大切なのは日々の診療を丁寧に積み重ねることであると考えております。再びこの地域で医療に携われることに感謝し、患者様に信頼していただける泌尿器科医であり続けられるよう、今後も研鑽を重ねてまいります。皆様、何卒よろしくお願い申し上げます。



編集後記

鮭は栄養豊富で鮭に含まれる栄養成分には、美容や健康に効果的なものがあります。免疫力の向上、記憶力の向上、老化の防止などです。鮭の栄養を活かした食べ方をするためには、調理法を工夫することが大切です。ただし、食べ方次第ではせっかくの栄養素を無駄にしてしまう可能性もあるため、注意しなければなりません。相性の良い食材を組み合わせたり、効率よく吸収できる調理法を選んだり、工夫しながら鮭の味を楽しみましょう。

栄養科主任 蓮見秀晴